博士（経営学）　崔　　光

学位論文題名

企業における情報の価値創造メカニズム

－ルースカプリング組織を中心に－

学位論文内容の要旨

本研究では，今日の企業が顧客に価値ある情報を生み出していくためには，情報の価値創造メカニズムをいかに構築していくべきかについて，ルースカプリング型組織を中心に分析する。

経営学の分野において，情報創造を本格的に議論した研究は少ない。その中で，情報創造に関する研究では，情報技術の活用を通じて情報創造をいかに支援していくかに関心がもたれていた。一方，知識創造の理論では，組織的知の質を向上させる組織的仕組みの重要性を強調している。企業が，情報システムと組織的仕組みのどちらかだけで，顧客に価値ある情報を生み出していくことは困難である。両者は，情報創造の視点の下で，有機的に統合される必要がある。

情報創造の本質は，情報における価値を創造することにある。企業における価値創造には，市場の多様な素情報から本質的な意味を解釈する「情報の意味解釈」と，把握した意味を顧客に価値ある製品やサービスとして具体化していく「情報の価値実現」という二つのポイントがある。本稿では，それぞれに対して以下のように具体的な研究課題を設定し，事例分析を通して分析を試みた。

1)　ルースカプリング型企業において，情報創造を促進させる組織的仕組みの有効性は，情報創造の場をいかにデザインするかによって決まる。本稿では，ルースカプリングの概念を弁証法的に解釈することを主張したワイクの見解に基づき，①サブシステムの独立性と反応性の間の均衡，②サブシステムと全体の意思決定の調和，③市場のドラスティックな変化を柔軟に捉える場づくりのメカニズム，などのような組織的仕組みの具体的な構築方法を示した。

2)　情報創造を情報システムの構築を通して支援していくためには，①情報創造を志向する情報化のビジョン，②多様で幅広い情報領域を含めた情報のドメイン，③市場の変化や多様な情報分析ニーズに応じられる情報システム開発の仕組み，の三つの要素を情報システムの構築戦略の中に取り入れる必要がある。

3)　情報創造の視点から，情報システムと組織を統合することが重要である。その際，情報のコンテントの処理メカニズム(情報システム)と情報のコンテクストの編集メカニズム(場づくり)を有機的に統合することによって，的確な情報の意味解釈が可能になることが明らかになった。

4)　本稿では価値星座モデルを，ルースカプリング型企業の価値創造のモデルとして取り上げた。企業が顧客に価値ある製品を提供していくためには，情報，技術，

製品の文脈付けメカニズムと自社の価値創造プロセスを有機的に結合することによって，コアコンピタンスを獲得できることが明らかになった。

以上の分析から，本稿では今日の企業における価値創造のメカニズムを総合的に究明することができた。本研究においては，これまで経営学で本格的に議論されてこなかった企業の価値創造という課題にメスを入れ，従来の組織論や情報システムの理論で解明されていなかった本質的な課題に挑戦し，様々な理論的・実践的含意を提示することができた。今後，多様な産業文脈の中で，本研究で示された情報の価値創造メカニズムの一般的な適用可能性をさらに研究していく必要がある。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　金　井　一　頼
副　査　　教　授　　寺　本　義　也
副　査　　教　授　　小　島　廣　光
副　査　　教　授　　関　口　恭　毅
副　査　　助教授　　柴　田　裕　通

学位論文題名

企業における情報の価値創造メカニズム

－ルースカプリング組織を中心に－

本論文は、情報の価値創造のプロセスに関して、ルースカップリング型企業を対象に情報システムと組織の有機的な統合メカニズムを解明した先駆的な実証研究である。

経営学において、崔氏のように情報創造プロセスを組織と情報システムの有機的な関係の視点から総合的に分析した研究はあまり多くない。崔氏の研究は、このような理論的に未整備の研究領域に対して既存の関連分野の諸研究を批判的に検討し、情報創造のプロセスを分析するための統合的な分析枠組を提示して、それに基づき実証的分析を行っている意欲的な研究である。なお、本論文は全体で７章から構成され、Ａ４版で１３１頁にまとめられている。以下、本論文の要旨を紹介する。

１章では、企業活動における情報創造の意義が指摘され、そのメカニズムの解明に向けて次のような問題提起をしている。情報創造は、市場の素情報から本質的な意味を解釈する「情報の意味解釈」プロセスと、把握した意味を顧客にとって価値ある製品やサービスに具体化していく「情報の価値実現」プロセスから構成されている。このプロセスを促進させていくためには、どのような組織的仕組みと情報システムが必要であり、またいかに両者を統合させていくかを解明することが課題であるとしている。

２章では、組織的知の創造と情報の意味解釈に関する既存の研究のレビューが行われており、これらの研究の批判的検討に基づいて上述した「情報の意味解釈プロセス」「情報の価値実現プロセス」および両プロセスを支援する組織的仕組み、情報システム、コアコンピタンスから構成される本論文の分析枠組が提示されている。

３章は、情報創造と組織的仕組みとの関係を分析している部分であり、ルースカップリング型組織と情報創造の関係について前川製作所のケース分析を通じて解明している。氏は、最終的な意志決定の権限を持つ自律的な組織である独立法人が、自らの意志で全体と

分散と集中を行うことが可能な当社の独特な仕組みが、情報創造にとって有効なメカニズムとして機能していることを明らかにしている。

４章が、情報創造と情報システムの関係を検討している部分である。崔氏は、従来の情報処理パースペクティブのもつ静態的情報システム観の批判的検討を通じて、「情報化のビジョン」「情報のドメイン」「情報システム構築」の有機的な結合から構成される新たな情報システムの構築戦略を提示し、薬局のボランタリー・チェーンであるファルマの事例研究によって情報創造との関係を解明している。

続く５章が、情報創造の観点からルースカップリング型企業における情報システムと組織の統合について検討している章である。崔氏は、情報の意味解釈においては断片的な素情報の背後にあるコンテクストを把握し、構成員間の相互連結行動を組織化することによって、これらの部分的なコンテクストを編集し、全体的なコンテクストを創造していくことが必要であると考える。そしてこのことを行うためには情報システムのみでは困難であり、組織的な仕組みの構築との有機的な統合が要請されるという氏独特の考え方を提示する。

このような考え方に基づいて崔氏は、「情報のコンテクスト編集メカニズム」と「情報のコンテント処理メカニズム」の両メカニズムがドメインレベル、スキーマレベル、分析レベルでそれぞれ統合されるというモデルを提出する。そして、このモデルに基づいてファルマと前川製作所の比較事例分析を行ない、情報のコンテント処理メカニズムと情報のコンテクスト編集メカニズムを有機的に統合することが、的確な情報の意味解釈の要件であることを明らかにするとともに、両企業が、異なった統合の様式を採用していることも指摘している。

６章は、情報の価値実現プロセスとコアコンピタンスとの関係に関する分析が展開されている部分である。本章において、崔氏は意味解釈された情報が、顧客価値を実現するために製品やサービスとして具体化するためには、技術や多様な資源によって媒介されることが必要であると考え、情報、技術（資源）、製品の文脈づけを行っていくためのメカニズムを明らかにした。さらに、このメカニズムを価値創造プロセスと統合することが重要であり、それがダイナミックな事業の展開につながるコアコンピタンスの源泉であることをミスミのケース分析を通じて明らかにした。

最後の７章において、これまでの研究結果のまとめ、理論的および実践的含意と今後の課題が提出されている。まず、理論的含意としては、第一に、情報創造を行っていくためには情報システムと組織の有機的な統合が必要であることを明らかにし、既存の研究に対し統合的な観点を提示している。第二に、情報の創造を、情報の意味解釈と情報の価値実現という二つのサブプロセスから構成される情報の価値創造モデルを提示し、実証的な分析を試みた。

次に、実践的な含意としては、現代企業にとって顧客価値の創造は重要な課題であるが、それを具体的に実現していくために要求される情報システムと組織的仕組みの構築方法や、両者を統合する方法を提示したことである。

今後の研究課題として、第一に、ルースカプリング型組織とタイトカプリング型組織における情報創造プロセスの比較研究を通じて両組織の情報創造の仕組みの違いを解明することである。第二に、本論文ではコアコンピタンスと情報創造プロセスの関係が必ずしも十分に解明されたとは言い難い。従って、多様な組織を対象に両者の関係を究明していくことが課題として残された。

以上のような要旨によって構成されている本論文について審査委員会の評価は以下の通りである。

（1）既存の情報創造に関する研究において、組織と情報システムの総合的な視点から分析した研究はほとんどない。崔氏は、両者の有機的な関係をふまえた独自の統合的な分析枠組を構築し、それに基づいて情報創造のプロセスを実証的に解明することでこれまでの研究を大きく前進させたことが審査委員会で高く評価された。

（2）これまで大学組織を中心に展開されてきたルースカプリング型組織の研究に対して、企業組織を対象に情報創造との関係を分析し、既存のルースカプリング型組織の研究に新たな知見を加えた。

（3）問題意識がきわめて明瞭であり、適切なフレームワークを構築しそれに基づいて堅実な実証分析を行い、現代の企業の重要な問題に対して一定の指針を提供している。

なお、審査委員会において、第一に、明確な基準に基づきケースを選択する必要がある、第二に、分析結果の一般化に関して、ルースカプリング型組織を対象にしている以上、もっと限定的な表現が適切である、第三に、情報システムの構築戦略を実行するための具体的な含意を提示することが必要であるといった指摘がなされた。また、情報創造に関する日韓の比較研究を行うことによって、研究を一層前進させることが可能になるという示唆もあった。

以上の所見を総合して、提出された論文は執筆者が自立した研究者として研究を展開していくことができる資格と能力があることを確認するのに十分値するものと審査委員会全員の合意を得ることができた。よって、本審査委員会は本論文を博士（経営学）の学位授与に値するものと判断した。